

令和元年6月6日現在

機関番号：45206

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01938

研究課題名(和文)近代日本における「かわいい」の生成に関する研究 - 「少女文化」を事例として

研究課題名(英文) Research on the Emergence of the Concept of "Kawaii" in Modern Japan: A Case Study of "Girls' Culture"

研究代表者

渡部 周子 (Watanabe, Shuko)

島根県立大学短期大学部・総合文化学科・講師

研究者番号：70422582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本における「かわいい」の生成を、少女文化を事例として考察した。少女雑誌『少女の友』は、「可愛い」を、愛される性質や愛護の感情への称賛の意で用いた。同誌が、「可愛い」に対置したのが、「華やか」なことである。競合誌『少女世界』が肯定的に捉えた「華やか」なことを、『少女の友』は文学志向と結び付け排除した。排除という現象によって、「可愛い」は、規範として純化していった。「可愛い」は、良妻賢母という模範像と相関性を有す、「少女」期特有のジェンダー規範として機能したのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、「かわいい」は、日本特有の美意識として、国際的に脚光を浴びている。「かわいい」に関する考察は活発になされつつも、歴史的な考察は未だ十分だとはいえない。「かわいい」文化は戦前に存在しなかったとする見解は、半ば通説と化している。所与の前提のように見なされがちな、少女文化との結びつきも、歴史的な観点から考察する必要がある。そこで、本研究は、「かわいい」の歴史的形成を、少女文化が形成されゆく戦前の日本を対象に分析した。日本の少女文化が世界中から注目を浴び、「かわいい」が現代日本の美学としてもてはやされる今、近代日本における「かわいい」の生成を明らかにする本研究は、国際的な意義を有すと考える。

研究成果の概要(英文)：This study considers the emergence of the concept of "kawaii" in modern Japan, with a special focus on girls' culture as a case study. The girls' magazine, Shojo no Tomo (The Girls' Friend), used the word "kawaii" to positively express lovability and the emotion of wanting to protect something. The same magazine contrasted "kawaii" with "hanayaka (gorgeousness)." In fact, "hanayaka (gorgeousness)" was referenced positively by a competitor magazine, Shojo Sekai (Girls' World). Shojo no Tomo's approach was to associate the term with being a "bookworm", thereby excluding it as a suitable aspirational model. Through this phenomenon of exclusion, the concept of "kawaii" was purified as a standard for girls. In this manner, "kawaii" has a correlation with the model of a "good wife and wise mother", functioning as a gender norm specific to girls.

研究分野：ジェンダー

キーワード：少女 少女文化 かわいい 少女雑誌 『少女の友』 『少女世界』

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は、『<少女>像の誕生』(新泉社、2007年)で、近代日本における少女期の「ジェンダー規範」の形成を解明した。この著書は「第23回女性史青山なを賞」を受賞した。明治期の学校制度の確立により就学期間が長くなり、生殖可能な身体を持ちつつも結婚まで猶予された期間が長期化した。この「生殖待機」期間を「少女」期と捉え、明治政府が少女に与えた良妻賢母となるうえでの準備教育を、フレーベル、シラー、ラスキン等の西洋思想との関係から考察した。その結果、他者への献身を求める「愛情」規範、心身の清らかさを求める「純潔」規範、容貌の美しさを求める「美的」規範という性差に固有の規範が与えられたことを解明した。

研究を進める過程で、「かわいい」という理念も、「愛」「純潔」「美」というジェンダー規範の形成と、複合的に生じた、「少女」期特有の教育的理念として解釈できるのではないかという、問題意識を抱くに至った。

日本特有の文化として、現在国際的に脚光を浴びる「かわいい」文化だが、戦後の消費社会特有の少女文化として、議論がなされてから概ね30年が経過している。大塚英志『少女民俗学』(光文社、1989年)、宮台真司他『サブカルチャー神話解体』(PARCO出版、1993年)等が著名である。先行研究の課題は、現代社会の分析に終始し、戦前の検証が不十分な点である。四方田犬彦による『「かわいい」論』(筑摩書房、2006年)は、歴史認識の点で一線を画し、「かわいい」の源流を11世紀初頭の『枕草子』に見出すが、しかし少女文化、とりわけ近代に関する考察を目的とする研究ではない。もっぱら議論が集中しているのは、戦後それも1960年代以降である。「かわいい」を戦後の文化とする宮台等の解釈は、後続の研究者の間で支持され、半ば定説と化している。その根拠は「かわいい」という言葉すら、戦前の少女雑誌には見られないという主張である(宮台他前掲書)。

また、従来、「かわいい」は、教育的理念と隔絶したものと捉えられがちであった。増淵宗一は、「子どもの理想像」として「よい子」を挙げ、「かわいい少女」は「教育的倫理的概念ではない」と位置づける(『かわいい症候群』日本放送出版協会、1994年、64-68ページ)。

なお、三橋弘次とマシュー・バーデルスキーは、2000年代の日本の幼児保育の現場での「女の子」を「かわいい」に執着させる規範的な仕組みを問題化している(「かわいい女の子」はいかにして可能か、『国立女性教育会館研究ジャーナル』2009年3月)。この指摘は、研究対象は異なれども、「かわいい」を教育的理念として、捉えなおすという点で、問題意識を共有するものである。

このように、戦前の少女文化を対象とした研究は、これまで十分になされておらず、この空白部に本研究は切り込むことにした。

研究の前提となる「可愛い」の語源説について、本研究は、漢語「愛」の複合語であり、その原義は「愛慕顧念して去りがたい」という意味の現代日本語的表現の展開と捉える(松下貞三『漢語「愛」とその複合語』あぼろん社、1982年、218ページ)。また、「かわいい」と「かわいらしい」は、主体と客体を明確に区別できず、意味・用法を限定できないとする松下の見解を支持し、「かわいい」と「かわいらしい」を同等に扱う(松下前掲書、215-218ページ)。

予備調査を行い、近代日本の少女文化において、「可愛い」は、他者を「愛しい」と思う感情と、他者から見て「愛らしい」という複数の意味を有することが明らかになった(渡部周子「「かわいい」の生成」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』2015年3月)。大正期の少女雑誌において、従順さや「無邪気」さを意味する言葉として編集者が解釈していたこと(例えば、星野水裏「水裏より」『少女の友』1912年11月)、さらに女子教育家も、他者から愛される資質と解釈していることを明らかにしている(嘉悦孝子「無邪気な心」『少女の友』1921年4月)。また、幼児等の小さく弱い存在への愛護の感情を有す「少女」が「可愛い」と称賛された。加えて、整った容姿を称賛する言葉でもあった(渡部前掲論文)。

すなわち、将来、良妻賢母となるうえでの有用な資質と捉えられていたのだと考えられる。「かわいい」を、女子教育における規範「愛情」と「美」との相関から分析することの意義を確信するに至り、本研究計画を開始することになった。

2. 研究の目的

本研究は、近代日本における「かわいい」の生成を、少女文化を分析対象とすることで、明らかにすることを目的とする。模範的女性像である良妻賢母と、「かわいい」の相関性を分析し、「少女」に与えられたジェンダー規範として捉え直す。以下、3.に挙げた方法を用い、1.で示した仮説を、補強させ、発展させる。

3. 研究の方法

分析の対象は、少女雑誌等の出版メディアを主要な対象としつつも、美術(挿絵)や文学等の文化の領域と、教育という社会制度とを、複合的に分析する手法を採る。

また、予備調査は、1910年代の『少女の友』を対象を限定していた(渡部前掲論文)。対象を広げ、研究を発展させる。

また分析の視点として、「可愛い」からの「逸脱」とされ、排除の対象とされた事象がなにかということに新たに注目する。「逸脱」そして排除という現象から、「可愛い」が「規範」として純化していく様相を浮かびあがらせる。

具体的には次の項目を分析する。

(1)教育的理念としての「かわいい」の捉え方

教育家にとっての「かわいい」の持つ意味を分析し、教育家の捉えるジェンダー規範との一致や不一致を明らかにする。

(2)美術や文学に描かれた「少女」像の調査

文学や美術といった芸術領域で理想とされる「少女」表象とはどのような存在かを踏まえ、少女文化の性質や、「かわいい」とは何かを相対的に捉える。

(3)現代社会における「かわいい」文化との相対化

現代の諸研究(またこれらの論考が対象とする現代社会の事象)において、「かわいい」とはどのように捉えられているのかを整理し、そのことを通して、本研究のアクチュアルな意義を問い、問題を相対化する視点を得る。

(4)出版メディアの調査

少女雑誌の作り手による「かわいい」の捉え方

編集後記や論説文、小説に用いられた「かわいい」という言葉の意味と用法を分析する。また、同時に「かわいい」に含まれないこととは、どういうことか、抽出する。

少女雑誌の読者による「かわいい」の受容と展開

読者投稿欄に用いられた、「かわいい」の意味と用法を考察し、読者の受容を明らかにする。

少女雑誌間での比較

戦前期を通して、継続的に発行された少女雑誌『少女の友』(實業之日本社)と、明治期という少女雑誌の草創期に最も良く売れていた『少女世界』(博文館)を比較し、雑誌間の違いを探る。

少年雑誌や児童雑誌の動向に関する調査

少女雑誌の特徴を相対的に掴むために、比較対象とする。

4. 研究成果

1. に示した予備調査の成果の補強と発展のために、3. の(1)(2)(3)によって、本研究の基盤的知識の獲得に努め、得られた成果の一部を論文にまとめている。また、3. の(4)に挙げた資料を比較考察し、得られた主な成果を以下で説明する。

少年雑誌との比較

「可愛い」とは、「少女」にとって、規範的な理念であり、将来、良妻賢母となる上での有用な資質と捉えられていたことは、予備調査で明らかになっている。

では、「少年」はどうだったのだろうか。『日本少年』(實業之日本社)には「話の種」という読者の投稿による滑稽な作文を載せる欄がある(創作か実話に基づくか不明である)。同欄掲載の吉川重蔵による「可愛がって貰はなくてもいい」では、父親に叱られた太郎に対して、母親が「可愛いから」叱るのだと諭すと、太郎は「可愛いがってもらはなくてもようございます」と応じるという内容である(『日本少年』1908年4月、84ページ)。「少女」は「可愛い」存在であらねばならないが、「少年」は、「可愛い」く有りたくないと言えたと主張しえたのである。

少女雑誌間の比較

少女雑誌『少女の友』(實業之日本社)と、『少女世界』(博文館)という二つの雑誌は、編集方針に違いがあったことが、「可愛い」という規範の成立に影響していることが、明らかになった。

1910年代の『少女の友』は、『少女世界』以上に良妻賢母主義を徹底していたことは、既に、久米依子が指摘している通りである。この差異は、投書家が文学者を目指すことを肯定する『少女世界』と、否定する『少女の友』という、文学志向の違いとしても現れている(久米依子『少女小説』の生成』青弓社、2013年、197-201ページ)。

『少女の友』では、「平易な可愛らしい文章」による投書を読者に求め、「つまらなくなった」という不評を招いても積極的に掲載した。また一方で、「華やかなむづかしい文章」を排していった(無署名「選者言」『少女の友』1912年8月、99ページ)。競合誌『少女世界』は、『少女の友』とは異なり、「少女の文章の特色」を、「若々しい感じ、華やか」なことだと見なし、これを「誇つてもよい」と述べている(無署名「少女の文章」『少女世界』1912年10月、45ページ)『少女の友』は、従来の基準では低い評価を受ける作文を、「少女」に相応しい、すなわち「可愛い」と価値付けすることで、推奨していったのである。それは、一体なぜなのか。文学者ではなく、良妻賢母となるべき「少女」読者には、不必要だと『少女の友』は捉えていたからだと解釈できよう。

『少女の友』は「可愛い」雑誌となることを目指し、「少女」自身も、「少女」の書く文章も「可愛い」ことが求められた。このようにして、つくりだされた「可愛い」という規範は、一過性のもものでは終わらなかった。編集者は、『少女の友』には「創刊当時より一貫した伝統」があり、それは「上品な、可愛らしい、家族的な雑誌」をつくることで、「今まで、二十数年間、その声価を維持」できたのは、この伝統によると述べている（無署名「編集局より」『少女の友』1929年7月、302ページ）。「可愛い」という規範的理念は、継続性を持って、機能したのである。

国内外における位置とインパクト

日本特有の美意識であるとして、注目を浴びる「かわいい」文化は、戦後社会の産物であると、従来の研究では見なされてきた。歴史的根拠に基づき、近代日本の少女文化における「かわいい」の生成を考察した本研究は、国の内外において、高い意義を有すと考える。

今後の展望

「少女」は、「愛」「純潔」「美」を備えた完全なる「愛の客体」であることが求められたのであり、このジェンダー規範を複合的に示したのが「可愛い」という理念であった。この受動的なジェンダー規範からの越境を、「少女」たちは願わなかったのか。「少女」たちによる、越境への希求を明かしたいという学術的問い抱くことになった。これを明らかにするため、戦前の少女雑誌『少女の友』に描かれた、異性装を分析すること、これが新たに解明すべき課題となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

渡部周子、黒田清輝の《木かげ》の「少女」 「農民」表象から見る視覚の近代化、島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要、査読有、55、2016年、1-9ページ
https://ushimane.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1618&item_no=1&page_id=13&block_id=21

〔学会発表〕(計1件)

渡部周子、「可愛い」とはどのようなことなのか 『少女の友』に見る「規範」の形成と「逸脱」行為の排除、日本児童文学学会 第57回研究大会、2018年

〔図書〕(計1件)

渡部周子、日本評論社、つくられた「少女」 「懲罰」としての病と死、2017年、231ページ

〔その他〕

渡部周子、「可愛い」とはどのようなことなのか 『少女の友』に見る「規範」の形成と「逸脱」行為の排除、日本児童文学学会 第57回研究大会 発表要旨集録、2018年、29ページ

渡部周子、女子学研究会、自著紹介 渡部周子『つくられた「少女」 「懲罰」としての病と死』(日本評論社、2017年) 2017年

渡部周子、「少女」表象について考える 傷病、死、弱さ、可愛さ、美しさ、大正・乙女デザイン研究所第51回月例会、2016年

渡部周子、日本の「かわいい」について考える 草創期の少女雑誌『少女の友』を中心として、大正乙女デザイン研究所 第48回月例会、2016年

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。